
愛とまことのストーリー

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛とまことのストーリー

【ZPDF】

Z0586F

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

主人公は探偵ロス。はじめは刑事者の事件を担当するが、依頼者の友人シャルリ・クイックの登場でいじめを主とした新しいストーリーがはじまる。愛があればかなうそういうストーリー。

探偵のさが

現代ではいじめといつものはいたずらのなれ果ての姿である。こんな小説を書いてしまつほど僕は馬鹿である。実はこれは探偵といじめの最後のストーリーである。

名前は……ロス。

200X年 謎の多いクレーザー街。

「ロス！ いるなら返事をしろ」

ガチャ。

「なんだね、こんな朝早く。まさかまた事件？」

「その通りです。詳しい話をしたいんですけど」

仕方ない。どうせ僕に解けない事件はないのだから。

まずは、ロスの推理力を見てもらいたい。

「私の名前はロバート・チエンです。有名なロス様に会えて光榮です」

「まつ、座つてよ。なんかほんと最近ついてなくてね。そんな話は置いといで、どうぞ言つて下さい」

「実は、事件は隣町のループタウンで起つたのです。そこには美しい木、花、鳥。」ご存知のようにすごく優しい町でした

「うん」

ロスはうなずいた。

「そんな町にも工場はあります。その工場では、鉄を取り扱っています。その鉄を溶かしていたときに事件が起つたんです」

「質問がある、その工場はどの辺にあるんだ」

「町の中です。もつとも人がいるかどうかは別ですが」

「どういふこと？」

「その工場は煙を多く出します。だからその辺の住民はどこかへ数

年前にほとんどでていつてしましました」

「なるほど、殺害方法について分かっていることはありますか」「どこからか叫びが聞こえてきました。それはすぐに溶炉からだと分かりました」

「うーん、なるほどそれ以外は分かっていないはずですよね。仕事中だったんでしょ」

「はい、でも一つ分かっていることがあります。誰もいない町では従業員以外は殺害不可能だと」

「確かにこの事件の様子では溶けた被害者が自分からやつたとは言いづらいから……、考える時間をもらつてもいいですか。一+一は必ず二になります、そういうことを証明して見せますよ」

「ほー、楽しみですね」

「あの今日はお一人で？」

「いえ、馬車に連れが一人、ループタウンの友達ですよ。気分が悪いんだとか」

「今度は是非そのお友達ともお話をせてください。今日は以上です」「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「さて帰つたら何しようかな」

「幼い心をもっているいい人だったなあ。確かに怪しいが。この事件の依頼をしてくるといふことは、おそらく被害者の知り

合いの知り合いかその辺だろうな」

「シャーロックホームズ、その名にふるえが止まらない。そんな小説を読むのが趣味のロス。もうだいぶ日が暮れてきた」

「毎日寝てるわけにはいかないからなあ」

「伸びました。僕は世界一の探偵になります」

「彼の家は三階建て後屋上。立派な事務所だ。普段は眠いから書斎にいるが、今は屋上にいる。考え方のときはいつも屋上」

「プースーん」ひらめいた。

トリックは分かった。後は犯人の特定のみ。

翌日……。

「ガランガラン」ベルが鳴る。

今日は運命の日。

「あつロバート君、もう一人はループタウンの……お名前は？」

「シャル＝クイックです」

「よろしく、シャル君」

「そりやあ、シャルって探偵を目指してたんだよな」ロバートは陽気だ。

ロスは考えてみた。こんな助手がいたらと。そして……。

「探偵になりたいのなら、この町はどうです？ これを運命にしませんか」

「ロスさん、でもそれじゃきつかけがありませんよ。僕は運命なんて信じていませんから」

シャル＝クイックはそう答えた。それはシャルのプライドの問題だつた。論理的に考えてロスもその答えに納得した。

「行きましょう、ロス。隣町ヘループタウンへ」

「そうですよ、よかつたら私の家も紹介させてもらえませんか」

ロスは直感していた、シャルは優秀だと、いろんな悩みがあるのだと。

シャル＝クイック

18歳 探偵を目指してハーバード大学へしかし探偵になるきっかけをうまくつかめず今も現役の大学生だ

探偵のさが（後書き）

面白かったですか、よければ続きを書きたいです。

犯人は……

依頼が来て数日、ロスは隣町ループタウンに調査に行くことになつた。

仲間になつた助手シャル＝クイックとともに、謎に挑む。

「ロバートさん、この辺がループタウンでしょうか」

「はい」

美しい町だつた。古風な様子が僕の心を癒した。

「きれいな町ですね」

そういうとロバートさんは補足してくれた。

「もうじきこういう風景が見れる場所も少なくなつてくるでしょう」「わかります。あの工場が問題なんですね」

「いえ、違いますよ」

「えっ？」

僕は不思議に思つた。

「都会からいろいろなものが移住していくのです。そうなつたらあの工場も移動せざるおえません」

「事件現場まで案内してくれますか」

深刻な話だつた。誰が見ても美しい景色が、開拓によつて汚されてしまうという。

「シャル＝クイック！ お前が説明してくれないか。詳しい事件の内容を」

「了解しました。私はロバートの友人ですが、その日はその工場に遊びに行つてました」

「はい」

「それでその工場で見たんです。溶解炉の前で死のうとしている姿を、最初は何をしようとしているか分かりませんでした、その数秒後にガイシャは落ちたのです。今頃気づいても遅いと感じたので誰

にも言いませんでした

すべてわかつた。

「謎は解けた」

「本当ですか」

「後は現場に行けば分かることですね」

ロスには何もかも分かつっていた。舞い散る落ち葉にロスの顔が隠された。

「ここです」

「なるほど」

ドアを開けた。「ガツシャン」

推測だつた推理が真実に変わつた。

「ロバートさん推理ショーをします。容疑者を集めてください」

「はいっ」

みんな集まつた。

「では、この事件をふちどつてるのはこの工場でした。そしてこの土地の人はすでに去つてもういない。そんな環境でした。僕が気になつたのはドアの音です、工場というものはドアは閉まるとき「ガツシャン」となるものです。そして溶解炉の位置……ドアの目の前の上のほうにありますよね。だから犯人は！」

「ゴクッ」ロバートはつばを飲んだ。

「シャル＝クイック！ お前だ」

「なんだと」

「あなたは自由してしまつたんです。罪の意識が潜在的に現れてね」「どういうことだロス」

容疑者も真剣に話を聞いていた、もちろんシャル＝も。

「あなたは僕を試していた。推理はこうです、自殺者は物音に敏感なものです。だから誰かが来たら隠れるでしょう。でもあなたはそんなことは一切私に伝えなかつた。といつことはその話自体が工作だつたんです」

「どういふことだ」

「静かに閉めたんだよ」

シャル＝クイックは否定する。

「それならあなたは『ガイシャは死のうとしていた』といいましたよね。それは犯行を隠すための言い間違いです」

「これからガイシャは死のうとしていなかつた。ただその中を見ていたんです、黄昏てね」

ロバートが口を開く。

「じゃあ、黄昏ていた被害者をシャル＝クイックは巧妙な話で突き落としたのか」

「もちろんです」

シャル＝は泣きそうだった。

「どんな話で釣つたかは知りませんが、犯行ができたのはあなただけだシャル＝クイック！」

「そうだ、ツフフフ僕が考えた巧妙なトリックだ」

「はつ、口先だけでここまでごまかせる犯罪者がいたとはね」「でも、ばれましたよね。僕は確かめたかつた。人間の強度を、誰もしなかつたことがしたかつたんだ」

「よく言えば探偵向きだ。でもお前らしくないことだつたな」「ハツとして」

「お前は優秀な大学にいたら、だからその学校に詳しい話を聞いたんだ探偵として……そしたらお前は命を救つた優秀な生徒だつてことが分かつたんだよ。こつちが聞きたいどうしてこんなことを？」

「探偵になりたかつた、それだけだ」

「おとなしく逮捕されてもうつ」ロバートが最後の言葉を締めくくつた。

「いつかオレの助手になれ」

「おう」

シャルリは親指を立てた。

天才が犯罪者になるとこのようにかなり巧妙は口実を作つてしまふのです。

僕はそんな奴にもいいところがあると知つた、そう感じた。
誰もが天才なわけではない、凡人の僕にも天才の気持ちが分かつたのだから……。

犯罪は悪だ！

一年たつた。

裁判では自殺目的のガイシャを後押ししたというだけなので、一年で済んだ。
新しいスタートで物語は始まる。

犯人は……（後書き）

いじめの話題は次話

シャル＝クイックが釈放されて二日。
わからないことだらけだ。

僕に来た依頼は尋常なものではなかつたからだ。

あの溶解炉事件からの一年で僕はかなり有名な探偵になつた。ク
レーザー街でもナンバーワンだ。

「コンコンカラーンカラーン」

玄関で呼び鈴がなつてゐるよつだ。

次の事件はなんだろつ。

「シャル＝じやないか、久しぶりだな」

「シャル＝クイックは確かにロス探偵事務所に釈放した」

「お世話になりました」

シャル＝は変貌してゐた、少なくとも前のシャル＝じやなかつた。

「どうしたんだ敬語なんて使って」

「どうしたもこうしたもないよ

「どうしたんだよ」

ロスは困つた、こんなときにすべきことがまつたく分からなかつたからだ。

ロスは電話をかけた。クレーザー街警察署に……。

「警視総監のトックさんいますか」

「トックさんは今は事件で忙しいのです、お名前を聞いておいても
よろしいですか」

「ロスです」

「分かりました」

病氣のようになつてゐるシャル＝を励まして、話題を変えてみた。

「いままでは僕は自分のことしか考えてなかつた、でも今は違つてみた。

「何が言いたい」

シャル＝独房は予想以上に悲惨だったようだ。その心の闇を取り除ける警察の人間を僕はあたつた。名前はルース・トック、警視総監だ。特に学校問題を担当している優秀な奴でこれからはお世話になりそうな人物だ。

ロスという名前のせいか学校問題についての依頼が最近多い。ロスという名前の響きのせいだろうか。わからない、でもきっとわかることがある。

「クイック、これ以上ひねくれてもしようがないだろ。お前の分の重みは僕が全部背負うから元気出せよ」

シャル＝はクイックと呼ばれたことで心境が変わった。

「確かに」笑っていた。「それならオレも頑張れるかも」

こうしてシャル＝とロスは心を打ち溶かし、もう一度戦うことを決意した。

童貞探偵ロス、元犯罪者探偵シャル＝クイック助手、二人のコンビでもう一度。

「シャル＝、荷物の用意を早くしろ。そろそろ列車が出る時間だ」

「うかい」

シャル＝はめんどくさいことが苦手だということが分かった。でも才能はある。

「そこにランプがあるだろ、それを持ってきてくれ。夜にもいろいろやることがある」

いましているのは旅の支度だ。まだ事件とは呼べない未事件に挑むという大偉業をなそうとするロスの計画だ。

「えー私の推理で行きますと、列車は後三十秒後に出発するでしょう、えーはいー」

もちろん駅は近かつた。

「シユワツーーーシユツ」

列車が出発する音がした。

「どうしてそんなことがわかつたんだ。腕時計なんて高いものは持つてないだろ」

「これが僕の能力とだけ言つておく。体内時計能力かな」

「へえ〜」

これから先のことを考えてみた。列車に乗つたはいいが何をすればいいのか分からなくなるということはないだろうか。まずしなければいけないのはどうやって社会問題をなくすか考えている学者さんにお会いに行くことだ。

ヘイル教授、ガイハハ教授、セルミナク先生、まずはこの三人だ。

そんなことを考えていた。

「行きますよ、ロスさん」

「承つた、行くぞ」

駅に着いた。近くて助かる。日々の疲労が取れるのが駅内足湯だ。足湯につかる時間があつたので非常にすがすがしかった。

「後五分だよ」

「了解」

シャル＝はめんどくさい足湯が嫌いらしい。

僕は足湯をたたみ、まっすぐ列車の入り口に出向いた。

「さすがシャル＝列車の色とおそいだ」

シャル＝の服は赤だった。

「変なところに気がつくね、ロスの灰色の服はポワロみたいでかっこいいのにね」

シャル＝はこうこうとこりですぐ傷つく、もう少し頑張つてほしい。

「デジマイ、列車とおそいも気分的に楽しくなるもんだぜ」

こうして短くも密度の濃い、新たな旅が始まった。

推理しよう、これからことを。

このときロスは約束した、シャル＝を救うと。

「もしもしトップ警視総監ですね。シャルリと代わります
精一杯楽しめよシャルリ、天才なんだし。」

旅出（後書き）

遠慮ない感想を！

「ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン」
列車の中は快適で涼しい、氷がたくさん置いてある。
「シャル＝これはあることを学ぶための旅だつてことは分かつてゐ
よね」

「それは教授に今起つてこいる謎の事件の研究書見せてもうつた
めの旅だる」「疲れたから寝るよ、あと四時間も列車だからね」
「まったくどこに行くんだよ」

列車が到着。

「ここはマスイー市、お降りの方はすみやかに降りましちよ
「眠い」降りた。
「確かに」シャル＝が降りた。
「どうやって行くか
「どうやっていくんだろう
「さて、歩くか
「歩」
「歩」
僕らはこれからセルミナク教授にいじめを教えてもらつ。そういう研究をしている人だからだ。
何を言われるかは分からぬ、でも信じる道を行けと思つた。
「シャル＝会話することがないな。この辺は殺風景だ
「そういうことをしゃべるつよ
「そうだな」

何時間歩いただろつ、コンパスで方角を確認しながらじゅうじゅう進んだ。
もうあつていつ間に夜になつたので、僕らは宿に泊まることにした。

「あ、ちょうどいいところに宿だ

「そうだね、口」

「だな、シ」

何もかもがめんどくさかった、シャルのその気持ちが分かった。
「せっかく休む時間があるんだ、会話でもしようよ」「
ところでロス、いじめを攻略する方法はいかが?」

「百円」

百円を出すロス。

「サンキュー、それは自分を演じることだ。それで一度はいじめを
攻略したことがある。それと相手の分からぬ分野の会話をしてみ
るのも手だ」

「五百円」

「最後だからな、脅しつて言つのはどうだ」

「脅し?」

「やつてみな快感だぜ」

「君の考え方が分かってしまうよ。もっと効果的なことを思いつく
人は存在するのだろうか」「

「知らないな、おつ寝たのか」

シャルの言つたことは難しいかもしない、でもこれが効果の
あるものだったとしたら、僕たちは思い違いをしているのかもしれ
ない。

「おはようございます」

「おはよう、シャル!」

眠そうにしている二人は同じことで悩んでいた。

「セルミナクさん!」

「そうですけど」

実はその宿のカウンターでバイトをしていたのがセルミナクだつ
たのだ。

「やっぱりそうでしたか、この宿は女しかカウンターにいないは

「 ずだそうだ。でもそこから調べてみたあなたはこの街では神並みの
権力をもつていると云ひことが分かつたんですよ」

「 できるフフ。できるねフツ。それだ僕がセルミナクだ」
「 新しいことが起きる、そんな雰囲気だつた。」

追伸

「 では、この街に来た君たちに本当のこと教えよう。わが事務所
に来てもらひよ」

「 そのつもりですセルミナクさん」

「 そうです」

「 いじめを攻略できるのか……、舞台は日本に移る。」

宿の娛樂（後書き）

ロスとシャル＝クイックのコンビネーションをあげてこくつもりです。読者の皆さんありがとうございます。

テズ現る

クレー・ザー街で今も研究を続けている一人。この町でかなり有名になつた。

犯罪の天才がいるのなら、いじめをする犯罪者がいるのなら、僕らはモリアーティー教授のような人と戦わなければいけないのだろう。

最後に勝つのは僕か、奴か……。

幾多のときが流れた夏、ロスは二十歳を迎えた。

「うわーあ、なんだこの新聞に載つていいことは……」

「いじめを裁くキラ、通称テズ……頭文字T」

「ロス！ これは一体どういうことでしょう」

「テズつというのは一体なののか、キラとの違いは……」

ふと、シャルリは現実を疑つた、この世界が本当に本物なのか。

記事

心臓・麻痺以外の殺し方を使う、このTは相当頭がいいと思われる。脳内解剖で脳の重要な部分が陥没していることを発見した。この殺し方を遠隔でできるなら、我々はいつ殺されてもおかしくないだろう。

「お、こっちの記事を見てくれ

「どうしたんだロス」

記事

天才現る、株 角^{つの} 学力テストで一位を獲得、インタビューしました……。

「関係していると思わないか」

「それでしょ、うか」

ロスに反論するのがシャル= のできることなのだ。

「偶然が重なることは危ないことです」

「そうかな、これは新聞記者の頭のいい奴が作った暗号なのかもしれないぜ。テズに知られるとやばい情報がここにあつたわけだ」

「一瞬ためらつたがシャル= は一言。『すごい、やっぱりロスはす
い』」

ひつしてロスとシャル= は日本へと飛んだのだった。

追伸

「日本の文化は最低だね」

「確かに、でもこれほど科学技術が発達しているなんてな。初耳だ
見ると21世紀並の科学技術が発達していた。ロス、これはおか
しいぞ。この時代は中世なのに。まさかタイム・スリップ? ジャ
ああの新聞はどうこいつことだ。」

隠し情報 これは現代のテズのやつたことなのかも。

テズ現る（後書き）

感想書いてくれよ。まじで書いてくれよーー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0586f/>

愛とまことのストーリー

2010年10月14日20時30分発行